

# PROGRAM NOTE

## 米海軍空母乗組員から宣教師へ

トーマス ワイズリー



私の名前はトーマス・ワイズリー (Thomas Wisley) です。もともと苗字は **Wise** (賢い) という綴りだったのですが、役所の届け出のときに **e** が抜け落ちたのです。高校までは家族とアメリカ各地を転々としていました。そのあとすぐに海軍航空隊を志願したのですが、その理由は、父が航空会社勤務、兄も海軍航空隊だったため周辺で飛行機ばかり見て育ったため、私の脳裏にはいつか遠い世界へ飛び立ってみたいという夢がありました。幸い航空母艦の艦載機の整備兵として遠洋航海訓練で日本へ行くことになり、米海軍の大型航空母艦ミッドウエーで横須賀に入港したのが 1957 年 (昭和 32 年) 19 歳の時でした。上陸許可が降りたので私は軽井沢をおとずれました。そこでは日本へ派遣された宣教師たちが集まって修養会をしていますが、アメリカ海軍の水兵がひとりで来たというのでみんなが同情してくれて日本人牧師の家に泊めてもらったのを覚えています。

もともと私の家はクリスチャン・ホームではありませんでした。テキサス州ダラスに住んでいたときに長男は日曜学校へ通っていて私も誘われていくようになりました。ある晩、いつものようにベッドで寝る前のお祈りを兄としていると「お前そのお祈りをどこで教わったの」と母親にきかれたので教会のことを話しました。それをきいた母親はそれから教会へ通うようになり、聖書の勉強もはじめたのです。ある日曜日に礼拝でピアノを弾く人が来なくて母親が代わりにたのまれたことがあります。どこで習ったのか母はピアノも歌もとても上手でした。父親もそのうち教会へ足を運ぶようになり、それから家族そろってのクリスチャン生活がはじまったのです。

ふりかえってみると、私の人生はいつも神と「ふたり連れ」だったようです。どんな時でも私は神の存在は疑ったことはありません。もうひとつ私が不思議に思うことは、どこにもクリスチャンがいて同じ神の家族としての交わりができるということです。航空母艦の乗組員は 3,500 人でしたが、艦内でも毎週 20 人ほどが集まって聖書の学びと祈りをともにすることができました。実は、日本に寄港している時に私は宣教師になりたいと思ったのです。そのきっかけは母が送ってくれた本でした。その本はエクアドルの東部ジャングルで若い生命を捧げた 5 人の宣教師の殉教物語 (1956 年) でした。読みすすむうちにその本にひきずりこまれ、青年たちの理想に燃えた行動のいさぎよさ、生命の危険をかえりみず神の愛を伝えようとした勇氣、それらに深い感動をおぼえたのです。とくに殉教者のひとりジム・エリオットが残した次の言葉が私の胸に突き刺さりました。

いつまでも手にできないものを失っても、失うことのない価値あるものを手に出来るのであれば、その行為は決して愚かなことではない。

「失うことのない価値あるもの」を私も人々に伝える宣教師になろうと決心した私は軍役を退いてシンプソン・カレッジで四年間学びました。卒業後、大学で知り合ったサンディと結婚してふたりそろって宣教師として東南アジアのタイへと向かったのです。タイでは地元の教会とハンセン病療養所の患者の世話をしました。そのうち国境でカンボジア内戦が激しくなりミッション本部から帰国命令が出ました。療養所の人たちが別れ際に「非常事態のさなかに自分たちの面倒をみるために遠いところから来てくれて本当にありがとう」とお礼を言われたときには人に奉仕する喜びを味わうことができました。

その後、私はタイでの10年間の宣教師体験を生かすためにフラー神学校へ藉をおいて「異文化間におけるコミュニケーション」の博士論文をまとめました。たとえ国が違い、言語が違い、慣習が違ってても、共通する価値観があるはずだ。それを聖書のなかに見出せるのか。また、キリスト教は世界各地でどのようにみられているのか。聖書はどう学べばいいのか……。博士号取得までには3年かかりましたが、私なりに結論づけたことは、伝えたいメッセージは、伝える手段よりも、何を、どのように伝えるかが先決であり、自分の声だけを張り上げる前に、まず相手を知り、相手の歴史、文化、生活習慣などを熟知した上で、相手にわかる言葉で伝えることが大事だということです。見せかけの情報だけでは上滑りするだけで、相手の心の琴線にふれることはできません。

これまでに、フィリピン大学とシャトル太平洋大学で5年間、日本では東京キリスト大学では9年間教鞭をとってきました。現在もアフリカ、インド、エジプトなどの大学で定期的に講座をひらいています。今住んでいるアリゾナ州ツーサン市では米国が受け入れたイスラム圏からの避難民家族の世話をしています。



教会の有志を集めて手づくりで簡易アパート群の建設も手がけました。クリスマスには毎年日本人教会の有志がクリスマス・キャロリングにきてくれるのをみんなで楽しみにしています。

後記：『エクアドルの5人の殉教者』後日談はHCJB 日本語ホームページの「HCJB 通信」2006年1月号に掲載されていますのでぜひお読みください。

## サタデー・トーク

## バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送

淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送

9月05日	戦後70年特集 戦争はいけませんね 清家はる	9月06日	聖書の見所をたずねて：聖書遊覧バス（97）
9月12日	神とふたり連れの人生 トム・ワイズリー（1）	9月13日	聖書の見所をたずねて：聖書遊覧バス（98）
9月19日	神とふたり連れの人生 トム・ワイズリー（2）	9月20日	リスナーからの「お便り交換の時間」
9月26日	インドネシアに遭わされて ダン・ワイズリー	9月27日	聖書の見所をたずねて：聖書遊覧バス（99）

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.org>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただきます。（mp3形式）

放送時間：日本時間 午前7時半～8時 17760kHz （再放送） 午後7時55分～8時25分 15400kHz  
（米国アリゾナ州制作／オーストラリア送信）